

河口慧海著作集

第一卷 西藏旅行記 (上)

うしお書店

チベット学の構築による大乘思想の解明

大正大学学長

村中祐生

時代の変わり目のときに、全く純粹に先見の明を発揮した賢人の業績が知られることは、まことに痛快であり驚嘆する思いがある。いま、日本の近現代史のなかでの日本仏教の歩みを考えるとき、その時代は激しい転換のなかにあり、仏教の態勢は復興と変動とを歴る必要があった。その復興の流れを創った仏教者の一人、河口慧海のチベット旅行は、近代仏教研究のありかたに関して、大きな曙光となるものであった。

まず想起するのは、明治の維新政治が行った廃仏毀釈がある。仏教の衝撃的な変動はそれに始まる。慧海の誕生や幼少期は、その直中のことであった。以後、日本は急速な近代化を進め、文化を根底から変容させる激動が続いた。戦争が続いた。慧海の生涯は、その時代にかさなるのである。出家を願った年には、教育勅語が發布された。村上專精

が仏教史を書き進めていた。そのころ、井上円了は仏教活論をもって仏教の復興をとえ、哲学館（東洋大学の前身）を創立して大乘仏教に新しい知見をもたらした。慧海は、その哲学館に学んだのである。

三十二歳のとき、熱血の僧はついに仏典の原典研究を志して、インドに渡り、チベット語を学ぶ。その翌年にはネパールを経て鎖国状態のチベットに入国する。そして、国籍が発覚して止むなく帰国した年、慧海は三十八歳。西藏旅行記を執筆して上梓した。その年、清沢満之が没し、内村鑑三が戦争反対を叫んでいた。時代は混沌とし、その翌年には日露戦争が始まった。慧海の活動は、その旅行を大転換の縁として、仏教の真実の復興を志したのである。インドの地で釈迦の仏教に尋ね、チベットで大乘仏教の本質を問う思いがあった。八十歳で生涯を終わるまで、チベット学を構築し、大乘仏教の真実の生き方を示した多くの著作を残した。ここに著作集が刊行されることを慶び、推薦する所以である。

『河口慧海著作集』の刊行にあたって

大正大学教授

大正大学総合佛教研究所長

松濤誠達

「河口慧海（一八六六・一・一二—一九四五・二・二四）」と聞けば、前後二回にわたって険阻寒冷なヒマラーヤ山脈を単身徒歩で超え、チベットに入った大探検家をイメージする向きも多いと思われる。事実河口師の大旅行は誠に驚異的であり、それを追体験しようとする人々が今もって後を絶たない。

しかし河口師のこの試みには、「佛教文献を正確に理解する」という大目的があった。まさにこの故に、河口師はネパールより膨大なサンスクリット写本を、チベットより大蔵経、および歴史書を初めとした重要な文献などを我が国に将来した。

河口師はこれに止まらず、これらの文献をもとにその翻訳を情熱的に試み、また原典

をもとにチベット仏教や一般仏教に関する多くの論文を発表された。ここにその著作のすべてを網羅して『河口慧海著作集』（全一六巻、別巻二）が刊行される運びとなり欣快の極みである。

もちろんその後チベット研究を初めとして、この領域の研究は急速に進展したので、問題とされるべき点も皆無ではないが、我が国におけるチベット学の先駆者でもある河口師による学問上の貢献に触れることは、研究史の上からも不可欠といえるであろう。

河口慧海著作集（全十六卷・別卷二）凡例

- 著者自身が認めた著書及び論文を網羅し、分野別発表年代順とした。
- 未発表原稿を発掘し、初めて公刊した。
- 表記は正字旧かなとし、発表当時の雰囲氣と姿をそのまま伝えるように工夫した。
- 著者自身による校訂朱筆をそのまま影印した。
- 今日では入手不可能な絶版本（初版本）及び雑誌文献を収録した。
- 各巻著書に連なる解説を付し、その現代的意義を明らかにした。
- 最終巻に年譜、著作目録を付した。

目次

- 西藏旅行記 上巻 一
- 探検の實相を語らざりし所以 四一五
- 西藏旅行記 改版の序 四一九
- 解説 四二七